OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	哲学をあなたと
Author(s)	川崎, 唯史
Citation	臨床哲学のメチエ. 2011, 17, p. 9-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3898
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

哲学をあなたと

川﨑 唯史

1. 対話とおしゃべり

7月26日、箕面市国際交流協会と大阪大学コミュニケーションデザイン・センター主催、臨床哲学研究室共催で、2011年度最初の「在住外国人との語り合いカフェ」が開かれた。テーマは「わたしの見た日本」。箕面に住む外国の人たちと、国際交流協会に職員あるいはボランティアとして関わっている人たち、それから臨床哲学のメンバーが集まって、30人以上の参加となった。カフェはまず「わたしの見た日本」について6人の在住外国人(ゲスト)が語り合い、そこで気になった話題や疑問を他の参加者が白紙に書きつけた。それらの言葉をもとに、後半は話題ごとに4つのグループに分かれて語り合った。

前半のゲストの方々の話を聴いていて、「サッカー観戦でどの国を応援するか」という話題がとくに気になった。今から思い返すと、家族や世代が個人にどうしようもなく与えてしまう影響がそこに色濃く表れていたからだろう。子どもがある家庭に生れるということについて話し合いたくて、後半は「アイデンティティ」をテーマとするグループに加わった。哲学カフェではなく「語り合いカフェ」ではあったが、そこでなされたのは哲学的な対話だったとおもう。

何が対話を対話にするのか。会話がすべて対話であるわけではない。判明には区別できないが、かりに「おしゃべり」と「対話」を対にしてみよう。おしゃべりは話題が何であれ、流れていくことをその特徴とする。言いたいことをお互いがとにかく言っておくことが目指され、思いもかけぬ返答や真意を尋ねる質問は求められていない。返事のように見えて、直前の発言と関係がないこともしばしばある。

これに比して対話は立ち止まる。発言が一つ出ると、その意味を全員が理解するまで先に進まない。発言した者が考えてもいなかったことを尋ねる質問がいくつも発せられる。

おしゃべりは生活していくうえでなくてはならないものだが、わたしは圧倒的に対話の方が好きだ。まして独りで考えることなどおよそ対話に及ばない(あくまで好みでいえば、だが)。なぜだろうか?

2. 口をついて出る

「今までさんざん悩んだので、アイ

デンティティのことはもう考えたくないし、できるだけ考えないようにしている」、「アイデンティティについて考えさせられるのは、一人で考えるときではなく、自己紹介のように他人に向かって自分のことを話すときではないか」、「アイデンティティとは『誇り』のことではないか」……。国籍という、じぶんの根幹にかかわるところから考えずにはいられなかった人、外国籍をもつ子どものアイデンティティ形成に職業として携わってきた人、来日して結婚し、日本で育つ子どもと暮らすなかで、子どものアイデンティティに影響を与えないでいることはできない人、あるいは日本人として生れ、特別の事情はなくとも、じぶんというものにいまだ納得がいかない人……。不適切な言い方かもしれないが、まさにここでこそ「アイデンティティ」を考えるべき場所だった。

対話の終盤、アイデンティティを「誇り」とみる意見を受けて、「捨てられるものをすべて捨てていって、それでも捨てられずに残ってしまったものが引き受けられてアイデンティティになるのではないか」という言葉が、わたしの口をついて出た。持論として懐に温めていたわけでもなく、誰かから聞いて覚えていたのでもなかった。その考えはそのときはじめて生れた。思い返せばいかにもわたしが言いそうなことだが、それまでは思いつかなかった。

誰より多くの時間をともに (?) 過ごしているじぶんの口から、頭をよぎったこともない言葉が、対話において発せられる。対話が一つのテーマをめぐって長い時間を費やすこと、じぶんの発言だったか他の人の発言だったか判然としなくなることなど、その理由はいくつか思いつくが、詳細に展開することはまだできない。ただし、他の人たちと話しているということが不可欠の条件であることは疑いを容れない。

なぜだろうか。これはわたしだけかもしれないが、ふだん一人でいるとき、思考はたいてい同じ道をなぞる。あるいは目先のことや今後の予定にばかり気が向く。生活のなかで感動したり傷ついたりしても、やがて流れていく時間のなかで脇に置かれ、忘れられていく (それが悪いと言っているわけではもちろんない)。わたしはわたし自身に問いかけることも、耳を傾けること

も、めったにない。

テーマと時間が設定されたうえで話すこと自体、日常から半歩ずれた行いではあるから、その場面設定そのものがすでに、ふだん思いつかないことの到来、わたし自身との出会いを促しているともいえる。しかし場の設定がすべてではない。他の人に聴かれているということがより大きな役割をもっているはずだ。

3. 自分の言葉で語る？

ところで、哲学カフェなど対話の場では「哲学者の言葉を引用しないこと」が一つのルールになっている。このルールの根拠は何か。すぐに思いつくのは、「参加者みんなに伝わる発言をすべきである」というものだが、哲学書からの引用でなくともほとんどの人に伝わらない発言をすることは可能だし、すべての哲学書が理解不能なわけでもない。それでは、「自分の言葉で語るべきである」はどうか。他ならぬわたしが対話に参加するのだから、これはたしかに説得的に見える。しかし、「自分の言葉」という観念の怪しさ (というか胡散臭さ) はただちに払拭しておきたい。

自分の言葉で語るとはどういうことか。「自分の」とは何か。他人と共有されていなければその役割を果たさないはずの言葉が、自分のものであるとはどういうことか。明らかに、語の意味が固有だということではない。とすれば、むしろ語り方が固有だということを意味すると考えるべきだろうか。書物になぞらえて文体が独特であるともいえるかもしれない。語り方には、口調や口癖から言葉の選び方や話の進め方、さらには問いの立て方までもが含まれる。自分の語り方をもつ、あるいはもとうとする者にとって、哲学書の引用は不要どころか妨げですらある。哲学者の文体は強固で、わたしたちの語りのなかにうまく収まらないからだ。

4. 聴かれることの効用

では、対話に参加する者すべてが自分の語り方をもっていれば対話は成功するのか。そうではない。対話が対話になるのは、それぞれの身についた語り方でもって流れるように交わされていた語りがつまずき、ひっかかり、よどむときだ。

何がこの停滞を引き起こすのか。それは、語り同士の衝突であるよりもむしろ、語りが聴かれていることそのものではないか。質問に先立って、聴く人の表情や振る舞いが、語る者に理解されていないことを伝え、語り直しを迫る。その場で対話者に理解されるた

めに、今までの語り方が―自分自身が、と言っても誤りではないようにおもうが―修正されざるをえなくなる。先にふれた語り合いカフェでの「口をついて出た」経験も、まさにそうしたタイミングでのことだった。

聴かれることは、わたしの語りを押し留める。そして、語り直しを通じてわたしの語り方そのものが編み直される。理解されるために自分の言葉を更新するときにこそ、新たな思考も訪れるだろう。それは哲学のはじまりでもあるはずだ。

対話それ自体が哲学となる次第については、別の機会に考えてみたい。

（かわさき　ただし）